

ハインリヒ・ベル『カタリーナ・ブルームの失われた名誉』試論 — 「やさしさ」と「しつこさ」、二種の関係形式による社会批判 —

木本 伸

1. テキストへのアプローチ

『カタリーナ・ブルームの失われた名誉』（以下『カタリーナ』と略記）は、1974年の公刊直後から大きな反響を呼び、戦後ドイツ文学の記憶に残る傑作の一つとなった。その理由の一つは、ノーベル賞を受けた人気作家と一部の活字メディアとの耳目を集めた事前の論戦にあった。1968年のパリで最高潮に達した世界的な政治的反乱の余波は高く、なおもドイツ社会は左翼過激派の活動によって揺さぶられていた。こうした状況でドイツの言論界をなかば支配し、反共の砦を自称するシュプリンガー系のメディアは、「報道の自由」という建前のもとに予断と憶測による記事を連ねていた¹。これに対して作家ベルはシュピーゲル誌に一文を投じて、人々に「過激アナーキスト集団」の虚像と実像を落ち着いて見分けるように、だが彼自身も感情的に、訴えたのである²。

一矢を受けたシュプリンガー系のメディアは、当然のようにビルト紙など圧倒的な物量による反撃を展開した。こうしてベルは扇情的な報道の渦中に引き込まれ、その渦は彼の家族まで及んでいった。例えば1974年2月、彼の息子ライムント・ベルの盗まれた軍人手帳が過激派のアジトで発見される。するとライムント・ベルは家宅捜索され検察の尋問を受けるとともに、たちまちメディア上で「疑惑の人」に仕立てられていった。その際に特記すべきことは、シュプリンガー系の新聞 *Berliner Zeitung* が当局の行動する7、8時間も以前に、この捜索の事実を報じていたことだ。ここには当局と一部メディアとの癒着関係が暗示されている³。こうした大掛かりなベル批判は、CDUの国会議員が「過激派」の支持者としてベルを名指しで批判し、公安問題に関する国会討論で彼の名前が繰り返し言及されるまでに達する。1972年6月7日、この討論の様子を車のラジオで聞いていた彼は、「喫茶店やレストランに入る気になれず、知人の家に立ち寄ってコーヒーを入れてもらった」（藤本、220頁）という。

こうした背景からシュピーゲル誌に連載された『カタリーナ』は、発表前から大きな話題を呼んだ。さらに出版社の宣伝も効果的に働いて、初版10万部で店頭に並んだ単行本は、期待通りの売れ行きを示し、ベルの作品としても最大の成功作となった。これを不快とした複数の新聞は、しばらくベストセラー・リストの公表を取り止めたという。このテキストでは、ある女性が謝肉祭の夜に警察の嫌疑のかかった若者と恋仲になり、彼の逃走を助けたために「犯罪者の愛人」として新聞に過去を暴か

れ、私生活を奪われていく過程が描かれている。つまり恣意的に犯人を決め付けた上で、「非人間に対しても人間的であらねばならないのか」(114)という態度で記事を捏造していくジャーナリズムのあり方が全編を通じて抉出されていく。そこには報道禍に晒された作家自身の体験も反映しているだろう。その意味でこのテキストは、報道のあり方を問題視してきた彼の発言の総決算であった。ベルはこれを10年後に回顧して「一つの反駁書」(N140)と呼んでいる。つまり彼自身が述べたように「作家も時には復讐したくなることもある」(Sowinski,S.13)し、少なからぬ二次文献も、これを「作家の復讐」⁴として理解してきたのである。

ベルは戦後の「廢虚文学」以来、つねに社会問題から目を逸らさない同時代の作家であり続けた。それが大衆作家としての彼の成功の理由であり、そのテキストに時代の証言としての質を与えてきた。だがそれは裏を返せば、歴史的状況が推移すれば、彼の文学から鋭さが失われていくことを意味する。『カタリーナ』が訴えるジャーナリズム批判も、今では日常的で退屈なテーマの一つだろう。だが作家がある状況と格闘したとき、そこに働く大きな論理を捉えて、密かにテキストに刻み込んだ可能性はないだろうか。この論理こそは「一つの反駁書」に作家の意図を超えた批判力を与えるだろう。本論で私は、彼が翻弄された状況を想起しつつ、テキストに秘められた論理の発見に努めたい。それだけが遠く時空をへだてたテキストと出会う、唯一の方法だと考えられるからである⁵。

2.現実の原型としての寓話

『カタリーナ』には、ある「新聞」(ZEITUNG)が登場する。これがビルト紙を揶揄していることは、ドイツ社会を知る者には一見して明らかだろう。ましてや論争の始終に立ち会わせて読者の「期待の地平」は、ベルの新作に当然のようにビルト紙批判を求めたに違いない。ところが作者は本文に先立って、次のような奇妙な注意を与えている。

この物語の人物や内容は、自由に創作されたものである。もしもジャーナリズムのやり方の描写においてビルト紙のやり方との類似が生じたとすれば、これらの類似点は意図されたものでも偶然でもなく、必然的(unvermeidlich)である。

テキスト中の新聞の文体や取材方法がビルト紙を模倣していることは、否定できない事実である。それでも両者の関係を偶然や作者の意図ではなく、ある種の必然性に帰するのは何のためだろうか。これを作者の空呆けと片付けるなら、理由は簡単である。つまり彼は現実の似姿としての物語世界を提示し、しかも両者を直接的な対関係から切り離すことで、テキストの現実に対する批判力を高めようとしたのである。だがこの場合には—少なくとも歴史的距離から一瞥すれば—やはりテキストは現実との双対の関係を離れ得ないことになる。それはジャーナリズム的な対象との直接性を意味する。

これに対して、ここで作者は現実を構成する何らかの理念から出発して、この理念から一つの物語世界を構築したとは考えられないだろうか。もちろん彼は、これらの理念を経験的な現実世界から学

んだに違いない。それでも抽象から具象へという思考運動の結果としてテキストが成立した限りにおいて、彼は現実と物語の類似点を「必然的」と主張する資格を持つのである。もちろん実際の現実、数個の理念で成立しているわけではない。その意味でテキストの成否は、これらの理念の深みにかかっている。理念が穿つ深みに応じて、テキストはそれが出生した環境以外でも現実の原型としての意味を持つだろう。

こうしてテキストが現実の原型を目指すとき、それはおのずと寓話の趣を漂わせ始める。寓話は、それ自体で完結した小宇宙である。実際に『カタリーナ』は、一種の円環構造をなしている。物語の導入部では、早くもカタリーナの復讐（射殺）という事件の結末が明らかにされる。そこから報告者は視点を出発点に戻して、当局の尋問記録や記者たちの暗躍をなぞりながら事件を説き明かしていくのである。こうして読者は自分の目で、『カタリーナ』という情報社会の悲劇の原型を確認していくことになる。新聞はビルト紙かも知れないし、他国の別のメディアかも知れない。カタリーナは過去の犠牲者かも知れないし、未来の自分であるかも知れない。このように『カタリーナ』を現代の寓話として捉え返すとき、テキストに秘められた作者の工夫が、さらに明らかになるだろう⁶。

3.名前と場所

名前

『カタリーナ』には沢山の人物が登場する。その中でも主軸となる二人の名前に、作者は寓話らしい象徴的な意味を込めたようだ。これらの意味は双対をなして、物語の展開を縦糸のように織り成していくのである。

まずはカタリーナ・ブルーム(Katharina Blum)。まず”Katharina”は、ギリシア語で「無垢な娘」(die Reine)を意味する言葉である(s.Balzer,7)。さらに同名の歴史的な形象として想起されるのは、ホルバインやデューラーの画材ともなったアレクサンドリアの殉教者カタリーナである。伝説によれば、聖カタリーナは4世紀のマクセンティウス帝の治世に、皇帝の前で50人の異教徒の哲学者と論争し、彼らをみなキリスト教に改宗させたという。また自分はキリストの花嫁であると主張して、皇帝との結婚を拒否したともいう。そのため西欧では、キリストとの「神秘の結婚」という秘教的イメージが強調された。首を刎ねられたのは、先の学者たちに対する火刑を皇帝に抗議したためらしい。次節で考えるように、ある種の言葉遣いについては極度に敏感で論争をいとわず、お尋ね者ゲッテンとの愛を貫く私たちの主人公は、現代の聖女カタリーナとも言えるだろう。さらに彼女が射撃の名手である点も(133)—このことは物語の最終部で重要な意味を持つことになる—剣を持った姿で描かれることのあるカトリックの聖女を継承しているのかも知れない。

またブルームという彼女の家族名は、ただちに「花」(Blume)を連想させる。これは彼女がゲッテンとの出会いの場となる謝肉祭の舞踏会へ、何の仮装もせず「ただ一本の紅いカーネーションを髪にさして」(16)出かけたことから確認できるだろう。以上の解釈からカタリーナ・ブルームという名前は、戦いも辞さず愛を守る「無垢な花」(die reine Blume)を意味するものと考えられる。

これと対照をなすのがテートゲス(Tötges)という名前である。テートゲスは新聞の花形記者であり、カタリーナの過去を掘り返し、読者の劣情をあおるような記事を捏造していく。つまり彼はテキストで、新聞を一身に体現する人物である。このテートゲスという名前は、二様の意味で「死」(Tod)を意味している。まず彼は「死を招きよせる者」(Todesherbeiführer)(102)、つまり「殺す」(töten)存在である。例えば彼は医者制止を無視し、療養中であるカタリーナの母にインタビューを敢行することで、彼女を死に至らしめてしまう。そのうえ彼は、この母の死を娘カタリーナの所業のせいと書き立てるのである。これは記者による第二にして最大の殺人、カタリーナの「名誉」(Ehre)の剥奪を意味している。彼女にとってテートゲスは「私の人生を破壊した男」(134)である。なぜなら彼はカタリーナを「盗賊の娼婦」(36)に仕立てることで、公衆の面前で彼女の「処女性」(Ehre)を掠奪したからである⁸。その一方でテートゲスは、最後は彼自身が死体となるべき存在である。この物語の結末には、おそらく作者の希望が託されているのだろう。これについては最終節でふれたい⁹。

場所

二人の名前が示すように、『カタリーナ』は愛と死の闘争の物語である。この古典的なテーマを表現する場所として、作者は必然的に同時代のドイツ社会を選択した。ならば敬虔なカトリック教徒であった彼の脳裏には、愛と死の問題においてキリスト教が果たすべき役割への期待と、教会の現状に対する批判が意識されていたのではないだろうか。

そもそもカタリーナは「敬虔で教会に忠実」(64)な少女であった。だが彼女は学校付き司祭のひどい仕打ち(ebd.)や世代の空気の中で、次第に教会から離れていく。それは教会という制度からの離反であった。しかし彼女の中でキリスト教の精神までが失われたわけではない。それを示唆するのは、テートゲスを射殺した彼女が自首する前に、二度も人気のない教会に入る場面である。あるいはカタリーナとは、キリスト教精神による教会批判の形象とさえ理解できるかもしれない。これに対して新聞記者たちは繰り返し「豚ども」と呼ばれている。カタリーナによれば、テートゲスなどは普通に人がいう意味では「カッコイイ」(135)のだが、それでも「本物の豚」(ebd.)である。つまり彼の中の本来的な何かが、直観的に「豚」(Schwein)として捉えられているのだ。これが一般的な蔑称であることは承知しつつも、聖書に登場する悪魔の形象としての「豚」の響きをここに重ね合わせることはできないだろうか。

私たちのテキストでキリスト教の問題が直接的に言及されることはほとんどない。だがここで扱われているのは愛と死の問題であり、これはドイツの作家にとってキリスト教なしには考えられないテーマであったろう。しかもそれは抽象的次元に止まることなく、実際の社会に即して思索されねばならない。なぜなら愛は定義により、自己を実現しようと欲するからだ。ならばキリスト教と現実の諸関係が交錯する場所とは何処なのか。それは作者によれば「教会と労働組合が協力して働ける領域」(101)である¹⁰。教会と労働組合の関心とは、本来的に人間の救済であろう。そして救済は、社会の矛盾が尖鋭に表現される場所でこそ最も必要とされる。それを1970年代のベルは、メディアの現場に認めた。なぜならメディアは「報道の自由」という正義の陰で、読者の劣情を煽り、謂れなき人間を

翻弄するような所業を繰り返していたからだ。このメディアの周辺こそ作者が現実の諸関係を抉り出し、現実的な救済の方向を模索するにふさわしい場所だったのである。

4. 「やさしさ」と「しつこさ」、二種の関係概念

テキストの前景で問われるのはメディアのあり方である。ところでメディア(Medium)とは、そもそも複数の人間を関係づける媒体のことであり、いかなる人間理解の立場を取るにせよ、これ自体を否定することはできない。つまり争うべきは、その存否ではなく形式の問題である。そして形式を決定するのは、何よりも伝達に関わる双方の態度だろう。これを愛憎の二分法で考えてみよう。例えば幼児の言語習得において、わが子の喃語を喜び、優しく言葉をかける母親の愛情は不可欠の前提だろう。反対に幼児の発する問いかけを周囲の大人が意図的に歪曲したり、無視したりすれば、その子は次第に発話への意欲を失い、喋れなくなるに違いない。それは成人の場合でも同様である。つまらないお喋りであれ、愚痴であれ、商用の話であれ、言語の潤沢な交通は、双方の信頼を前提として初めて成り立つ。反対に互いを傷つける憎しみの言葉は、ついには沈黙をもたらすだろう。つまり「愛」の言葉は活気を生み、憎しみの言葉は「死」をもたらすのである。

以上の点を確認して、テキストにおける様々な発話行為を整理していこう。するとまず目に付くのは、ある種の言葉遣いに対するカタリーナの執拗なこだわりである¹¹。それは早くもテキストの前半で、思わぬことから彼女が警察に拘引される場面で見出される。まずはそこまでの流れを確認しよう。ある知人宅の舞踏会でゲッテンと知り合ったカタリーナは、その場で意気投合し、彼とだけ「独占的に親密に」(17)踊る。その様子には、すでに謝肉祭の浮かれた空気にそぐわない「深刻さ、ほとんど厳粛さ」(70)があったという。それから二人は彼女の住居へ向い、一夜を過ごす。だがすべては、ゲッテンを追う警察によって監視されていた。そうとは知らないカタリーナは、軽い気持から彼に抜道を教え、結果として逃亡を幫助してしまう。一方で警官隊は、ついに夜明けを待ってマンションに突入する。ところが容疑者の姿はどこにもない。このとき獲物を逃がした警部バイツメンネは、忌々しさから「やつはお前とやったのか」と訊ねてしまう。これに対してカタリーナは、頬を染めつつも誇りに満ちて「いいえ、私ならそうは言わないわ」(Nein, ich würde es nicht so nennen) (19)と答えたのである。

この彼女の返答では、意図して問の次元がずらされている。なぜなら彼女は「やったのか」という訊問の内容には答えずに、仮に「やった」としても自分ならそうは表現しない(あなたが考えるようなそれはやっていない)と答えているからだ。つまり行為の存在を訊ねたバイツメンネに対して、カタリーナは行為の形式を問題にしている。それは「やる」(ficken)という表現が無意識に前提としている関係の形式を、鋭く問い返しているのだとも言えるだろう。このようにカタリーナの関心が性関係をめぐる言語に向けられたことは、考察に値する。セックスとは複数の身体が直接的に作用する場所に他ならない。つまり人間の身体において性関係は、精神における言語と同様に、ある種のメディアを意味している。しかも言語と性は、精神と身体の相互作用が示すように、不一にして一なる関係を

結んでいる。そのため性をめぐる言葉は、その発話者の内実を直接的に暴露するのである。

言語に愛憎による二形式が有り得るように、カタリーナによれば性関係は二種類に分けられるという。この見方は、彼女が家政婦として働くブルルナ夫妻宅で、政財界の招待客が酔うと彼女に示し始める態度をめぐって主張される(29f.)。初めに訊問記録の筆記者は、お偉方の態度を「やさしい」(zärtlich)という言葉で書き留めていた。この言葉は、おそらく愛撫(Zärtlichkeiten)に至る行為の表現として思い付かれたのだろう。ところがカタリーナは憤然として、連中の態度は「しつこい」(zudringlich)と言うべきものであり、言葉を入れ替えなければ自分は訊問記録に署名しないとまで言い張るのである。なぜなら彼女にとって「やさしさは二人による行為(eine beiderseitige [Handlung])で、しつこさは一方的な行為(eine einseitige Handlung)」(30)であるからだ。この二形式の相違は、彼女にとって「決定的な意味」(ebd.)を持つ。テキストを通じて彼女の言動を一貫するのは、この「しつこさ」を拒否して「やさしさ」を求めるという性格である。例えば過去に医師宅での仕事をやめたのも(23)、労働者の夫と別れたのも(30)、彼らが「しつこく」なったからである。これに対してゲッテンとの出会いでは、どちらもが「大きなやさしさ感じた」(54)のだと説明される。つまり愛する人とは「やったり」「やられたり」したのではないというわけだ。

カタリーナが人間関係を規定するために使った「一方的(einseitig)」および「双方向的(beiderseitig)」という概念は、再びメディア一般を分析する上で有効である。その本性上メディアは相互的なものに他ならない。だがメディアによって結ばれる両者の関係が一方的か双方向的かという問題は、つねに立てられるだろう。一方的な関係とは、一方の欲求によってが他方が恣意的に歪曲される場合である。その相手の事情を省みない態度は「しつこい」と呼ばれるにふさわしい。例えば一人の女性から「盗賊の娼婦」が仕立てられるとき、不安や希望を生きる捉えようのない彼女の生は、歪んだ戯画へと捨象されてしまう。その結果として、柔かな有機体は破滅へと追い込まれることになる。つまり一方的な関係は「死」をもたらすのである。カタリーナを追いつめる新聞が「ペスト」(83)に喩えられるのは、この点で可能で的確な解釈だろう。この獲物を追い立てる執拗な欲求が何に由来するのかは、ある意味で本論の設定をこえる形而上的な問題である。だが「人の神経を殺すことに歓びを覚える人々」(82)の欲求が、ある種の憎悪であることは確かだろう。

自己の視点から相手を規定しようとするのが、憎悪の基本である。例えば、わが子に良い子であれと欲するのは親の憎悪だろう。これに対して双方向的な関係では、ふくよかな生命がそのままに受け止められるはずだ。親の慈愛は、牢に入ろうとも、わが子を包む。こうした視線に見守られることで、生命は自己を自覚し充足するのである。愛する人と「大きなやさしさ」を分かち合ったカタリーナという言葉が、取調室の中でも自信と力に溢れるのはそのためである。もちろん愛という名で呼ばれようとも、奪い合う愛は相互に一方的な関係である。その意味で、カタリーナとゲッテンが体験したという相互的な愛情は希有だろう。作者が「やさしさ」について多くを語らない理由はそこにある。双方向的な関係は、憎悪の余白に生れる愛撫のような具体的な形象でしか、語り得ないものなのである。

5. 警察、新聞、群集

カタリーナは双方向的な関係を求めていく。彼女は「やさしさ」なしには、息づくことはできない。だが現実の社会を構成するのは、一方的な関係形式である。現実の諸関係において、「しつこさ」は自己を隅々まで貫徹していく。その運動は、最終的には社会制度として完結するだろう。この巨大な社会制度の中では、新聞は一角を占めるに過ぎない。作者が執拗に描出するのは、この一方性の原理に裏打ちされた社会の有様である。それは「無垢な花」が生きる場所を失い、追いつめられていく過程の記録でもあるだろう。

このテキストは謝肉祭の時期に設定されている。カタリーナとゲッテンの出会いから、新聞報道をへて記者テートグスの殺害まで、すべては異様に浮かれた社会状態の中に置かれている。この謝肉祭という時期は、人々の活動が活発になり、隠れていた欲求が顕在化するときだろう。それは換言すれば、精神と身体次元を問わず、利害の追求が剥き出しになる時期である。ある謝肉祭の役員は、殺害事件が祭りの終期に報じられたことを素直に歓ぶ。こんな事件が謝肉祭の初めにやられたのでは、酒類を営む彼にとって「商売あがったり」(12)だからだ。そこで彼は、この事件を「本当の流聖行為」(ebd.)と呼んでいる。この冒頭で紹介される逸話は、テキストが置かれた状況をつぶさに語っている。しかも「流聖行為」(Sakrilege)という言葉は、逆に商売の発想が教会まで浸透していることを暗示している¹²。商売の発想とは、一方性の原理の日常的な表現に他ならない。それはすべてを商品として捉え返す眼差しである¹³。そして作者が問題にしたのは、この商売の発想が商品を扱わない警察、新聞、教会および市井の人々まで浸透している事態だった。

まず新聞の態度が商売の発想によることは理解しやすい。そこではカタリーナは、一方性の原理によって大衆好みの玩具へと作り替えられていく。ところが問題は、独自の利害を持つ当局も、同様に人間を切り刻んでくという事実である。あるとき訊問中に「父親風」(32)の態度で近付いたバイツメンネは、カタリーナの黙秘によって峻拒される。これを作者は「決定的な心理的失策」(ebd.)と評している。なぜなら「やさしさ」を偽装して「しつこさ」を貫徹しようとする策略ほど、彼女の拒絶を呼ぶものはないからだ。バイツメンネの確信によれば、カタリーナの背後には「大きな陰謀」(34)が隠されている。それを証左するのは、カタリーナとゲッテンが出会った瞬間に示した「呪うべき親密さと優しさ」(73)である。刑事の目には「修道女」(53)と渾名されるほど異性関係に厳格な彼女が、一晩で見知らぬ男に身を委ねたのは怪しいとしか思われぬ。だが大きな出会いを待ち続けるカタリーナのような女性は、本当に一目で自分の「来るべき人」(59)を見抜くことがあるものだ。しかし特定の関心に視野を遮られた刑事には、こうした生の形が見えない。それどころか一方的な発想は、双方向的な関係を積極的に歪めていくのである。

その好例が「やさしさ」の歪曲である。「やさしさ」への執着は、カタリーナにとって唯一の自己表現だった。ところが「あなたの優しいルートヴィヒ君」(33)というバイツメンネの口の中では、もはや双方向的な関係は死滅している。さらに当局と情報を提供しあう新聞も(116)、これを即座に見出しとして採用する(「カタリーナ・ブルームの優しい恋人」113)。これによって睦み合う二人の関係を意味していた「やさしさ」は、直接的な性関係(「愛撫」)を暗示する言葉へと逆転され、相手構わず

セックスを欲する娼婦カタリーナという形象が捏造されたのである。この新聞による操作をへて、カタリーナは性関係を求める脅迫めいた手紙や電話に悩まされるようになる。これは事態の新たな展開を意味している。それまで彼女が直面したのは警察や新聞などの公的機関であった。ところが今や彼女は、欲情した群衆の目に晒されることになる。つまり私生活という彼女の最後の場所さえも、我欲に燃える視線によって浸されていくのである。もはやカタリーナに安住の場所はない。それは若い生命にとって、破滅の最終章を意味するだろう。

彼女を取り巻く「しつこさ」の特徴は、その匿名性にある。例えば手紙や電話で接近する人々は、彼女の肢体しか見てはいない。それは我欲によって一般化された肢体である。この一般化によって、人間は自他ともに無名化されていく。つまり匿名の視線は、相手をも匿名性へと引き込むのである。これは一方性の原理を生み出した憎悪の無名性に由来する事態だろう。憎悪は他者を自己の情念で塗り込めていく。そこには個性の発見を歓ぶ愛の眼差しは有り得ない。カタリーナがテートゲスの殺害後、夜の電話の主はこの男だったと直観するのは(137)、新聞と電話に共通する名前なき憎悪の声を聞き取ったのだ。「連中はあの子を破滅させるだろう。警察でなければ新聞が、新聞が興味をなくしたら、今度は民衆が」(40)というブルルナ婦人トルーデの言葉は、一連の状況に秘められた憎悪の論理を見抜いていたと言えるだろう。

カタリーナが主張する「やさしさ」と「しつこさ」という二種の関係形式は、そもそも彼女をめぐる男たちの態度を規定するものだった。この二種の関係形式は、しかし狭義の人間関係を離れた場面でも通用するだろう。なぜなら人間は、いかなる場面でも関係的存在であるからだ¹⁴。その際に無数の関係形式が二種類に大別される理由は、一方の「しつこさ」によって近代社会が成立しているからだ。他方の「やさしさ」は、近代社会の閉塞的状況を破砕し、人間に本来の充足をもたらす希望の原理として捉えられるだろう。こうした二形式による枠組みは、執筆当時の事情に制約された作者の意図をこえて、なおも現代社会を考える際の手がかりとなるように思われる。例えば環境問題では、自然に対する人間の一方的な収奪（「しつこさ」）を転じて、対話的あるいは双方向的な関係（「やさしさ」）が模索されているとは言えないだろうか。これと類似した問題は、学校や医療の現場など、あらゆるところで見出されるだろう。その意味で現代の寓話『カタリーナ』は、なおも批判的意義を失っていないと思われる。

6. 「愛」と「死」の危険なインタビュー

あらゆる方向から責め立てられて、カタリーナは崩壊していく。まず彼女は「無気力」(71)になる。そして自分の住居さえ平然と傷つけ始める(78f.)。それは現代の死神テートゲスが、愛の形象カタリーナを蝕んでいく過程である。しかし作者は最後の場面で、彼女に反攻への生気を吹き込むのである。

このテートゲス殺害の計画性については、謎が残る。事前に準備された拳銃は計画的な犯行を示唆するが、実際には突発的な所作であったのかも知れない。いずれにせよテートゲスに単独インタビューの機会を提供したのは、カタリーナ自身である。それは彼女の強い意志だった。彼女は後に、自分

の人生を引き裂いたのは、どんな人間なのか知りたかったと供述している(134)。もちろん弁護士プロルナは彼女を諫止しようと試みまし、せめて自分を同席させるように要求した。しかし、どちらの申し出も冷然と拒否されている。なぜなら共存できない二つの理念の体現者として、カタリーナとテートグスの接触は不可避だったからだ。さらに「愛」と「死」の交叉として、両者の会見では、すでに一方の没落は約束されていた。そこに余人が介入する余地はなかっただろう。

一件は次の通りである(134ff.)。事前にテートグスを確認するため、記者の集まる居酒屋へ出かけたカタリーナは、目的を達せず帰宅した。すると直後に呼鈴が鳴る。ドアの前に立っていたのは、恐るべき待人である。彼は彼女に向かい、いきなり挨拶代わりに「さあ、お花ちゃん(Blümchen)、これから僕たち二人で何をしよう」と話しかけた。そして奥間へ逃げる彼女を追い、もう一度「お花ちゃん」(Blümelein)と呼びかけながら、「まずは一発やろうじゃないの」と迫ろうとした。この「一発やろう」(bumsen)という言葉は、バイツメンネが口にした「やる」(ficken)と同次元の表現である。ならばカタリーナの拒絶は明らかだ。ただし事態は切迫していた。衣服に触れてきたテートグスに対して、彼女は瞬時に「一発やる、私がかまわないわ」と考えて拳銃を取り、射殺したのである。

こうして二人の会見は、本当に「一瞬の瞥見」(Interview)となった¹⁵。それは二本の高圧線が短絡するように、出会いの瞬間に火花を散らして決着したのである。カタリーナにこれほどの勇気と力を与えたのは、「あらゆる伝説や民話で大いに称えられる」「忠実と誇り」(N142)という性質だった。これに対してテートグスは、純粋な商業性と性的欲求そのものとして登場した(N145)。つまり彼女は「愛」を意味する寓話の主人公として、「死」を滅ぼしたのだ。犯行後カタリーナは、死体と凶器を遺して外に出る。そして映画を挿んで二度も教会に入る。なぜならそこは、謝肉祭の時期に「いくらかでも落ち着ける唯一の場所」(137)だったからだ。だが彼女は自分の中に、決して「後悔」(ebd.)を見出すことはできない。なぜならテートグスの殺害とは、彼女にとって愛の行為だったからだ。この後悔なき殺人という心理上の事実は、実はテキストの冒頭(9)でも確認されている。つまりこのテキストは、愛の行為の自己確認に挟まれた枠構造をなしている。ここで先の命題に戻るなら(第3節参照)、『カタリーナ』は愛と死の闘争と、前者の勝利への希望を描いた物語だったである。

7.希望のありか

しかし現実には、殺人によって問題が解決することは有り得ない。カタリーナの行為は、あくまでも寓話的な出来事として捉えるしかない。だが他方で、メディアによる殺人は日常的に存在する。ならば現実社会において、死を打破する愛の行為とは何なのだろうか。残念ながら作者は、この問題には答えていない¹⁶。あるいは、それは構造的に解答不能な問題なのかもしれない。寓話世界においてさえカタリーナは逮捕され、テートグスやシェンナーには次々と後継者が現れていく(125,130)。そして20世紀末の近代社会は、『カタリーナ』の作者が考えた以上に、一方性の原理を強めつつある。この自己破滅の危機が喧伝されるほどの社会状況では、愛の行為などは有り得ないのかもしれない。

しかし獄中のカタリーナは至って元気である。それは汚された生活を自分の手で清算し、なすべき

行為を果たした者の朗らかさだろう。そして何よりも彼女はゲッテンとの未来を夢見ている(127f.)。ただし二人が生きているのは、「もちろん、ここではない何処か」(irgendwo, natürlich nicht hier)(127)である。二人が愛を育むのは、一方性の原理が支配する社会では有り得ない。しかし、それはまた現実社会の外部でも有り得ない。それでは「ここではない何処か」を求める彼女の視線は、いかなる彼方を向いているのだろうか。

いかに社会制度が緻密になろうとも、そこから逃れ出る余白がある。なぜなら有機的な生命は、そもそも一方性の原理では押え込めない代物だからだ。そんな場所を作者はテキストの最後のページに書き込んだようだ。それは教会を出たカタリーナが、コーヒーを欲して、知人の喫茶店へ行く場面である(137)。まず彼女は店ではなく調理場へ入った。客の視線が面倒だったのかも知れない。それに店主の妻ケーテとは、以前からの知り合いだった。だが彼女も新聞の読者の一人である。そこでケーテは大切にコーヒーを注ぐと、記事の話を始めた。カタリーナは新聞の嘘を教えようとしたが、うまくいかない。しかしケーテは目で合図して、「だけど、この人を本当に愛しているんでしょう」とカタリーナに訊ねた。そこで彼女は「ええ」と答えて、コーヒーの札を言い、席を立ったのである。

人間同士が向い合えば、たいていは否応なく一方性の原理が働き始める。ケーテとカタリーナの関係も新聞によって媒介された。しかし二人は目と目で何かを語った。それは愛を確認する眼差しだった。愛は言葉で語られてはならない¹⁷。なぜなら言葉は、即座に制度へと組み込まれてしまうからだ。愛は暗号のように、目と目で語られるのがふさわしい。それは愛する者たちだけに通じる不思議な合図である。この視線という生の交叉は、今にも消え入りそうでありながら、同時に「死」による既存の社会制度を一撃で破壊する。しかもそれは、あらゆる場所と瞬間において可能である。微笑みあう瞳の輝き。それだけは、どんな一方性の原理も踏み込めない最後の領域なのである¹⁸。

註

使用するテキストは次の通り。Böll, Heinrich: Die verlorene Ehre der Katharina Blum oder: Wie Gewalt entstehen und wohin sie führen kann. Erzählung. Mit einem Nachwort des Autors: Zehn Jahre später. 32.Aufl. München(dtv) 1997. 同書からの引用は本文中に頁数のみを示す。後書の場合には、さらにNの記号を添えている。

¹ テキストでも、新聞の行動を「報道の自由」(65)という言葉で擁護する人物が登場する。

² Will Ulrike Meinhof Gnade oder freies Geleit? In: Der Spiegel, am 10.1.1972, S.54-57.『カタリーナ』の成立の背景と反響については、詳細な報告がある。本論の筆者も以下の文献に多くを教えられた。Balzer, Bernd: Heinrich Böll, Die verlorene Ehre der Katharina Blum. Frankfurt a.M.(Moritz Diesterweg) 1990./ Sowinski, Bernhard: Heinrich Böll, Die verlorene Ehre der Katharina Blum oder: Wie Gewalt entstehen und wohin sie führen kann: Interpretation.

2.Aufl. München(Oldenbourg) 1994.

藤本淳夫：西ドイツ「赤軍派」をめぐるH・ベルと「ビルト」紙の論戦について〔『カタリーナの失われた名誉』（サイマル出版会）1975、209-222頁（訳者解説）〕。

³ テキストでも、警部バイツメンネが新聞側の情報提供に感謝する場面がある(116)。

⁴ Bellmann,Werner: Heinrich Böll, Die verlorene Ehre der Katharina Blum oder: Wie Gewalt entstehen und wohin sie führen kann. In: Erzählung des 20.Jahrhunderts.2. Stuttgart(Reclam) 1996, S.183-204, hier S.184.

⁵ 例えば、ベルの創作動機を「庶民的正義感」（青木、59頁）に認めることは妥当だろう。しかし彼の正義感が由来する深みは、まだ十分に探られてはいない。こうした作業は、ベルの文学から現代的意義が失われたと喧伝される現在において、一つの意味を持つと思われる。青木順三：ハインリヒ・ベル再論〔『一橋論叢』第79巻第2号、1978、59-76頁〕。

⁶ しかし他方で作者は、テキストから寓話めいた印象を取り去るように努めている。それは寓話の作り話めいた嘘臭さを遠ざけるためだろう。そこで登場するのが「報告者」(Berichterstatter)(97)である。この報告者の視点は、一切に通じた全知の高みにはない。彼は尋問記録や関係者の証言など様々な水準の「情報源」(Quellen)を駆使して、事件の始終を再構成していく。そのため彼は自分の限界を率直に認めもする(96ff.)。この閉ざされたテキスト空間の内部にありつつ外部の情報へと開かれた報告者の設定は、『カタリーナ』の記述に客観性と真実らしさを与えていると言えるだろう。

⁷ 原語は”Räuberliebchen”である。Scheiffele(175)によれば、この”Liebchen”という言葉は、記事の文脈の中では「売春婦」(Dirne)を暗示しているという。Scheiffele, Eberhard: Kritische Sprachanalyse in Heinrich Bölls "Die verlorene Ehre der Katharina Blum". In: Basis, 9.Bd(1979), S.169-187.

⁸ 離婚歴を持つカタリーナは、厳密には「処女」ではない。しかし「失われた名誉」という表題には、性の名誉の毀損、つまり「失われた処女性」が暗示されているだろう。また作者によれば、表題の「名誉」は「尊厳」(Würde)(N142)の意味である。

⁹ テートゲスの同僚アドルフ・シェンナー(Adolf Schöner)の名前にも、作者の意図が読み取れる。そもそもアドルフという名前は、ドイツ人にとって一般的なものだった。しかし1970年代のドイツ人にとって、この名前は、すでに一つの象徴である。作者は、大袈裟な身振りで人々を扇動する大衆紙のカメラマンに、かつての政治的指導者の姿を重ね合わせたのだろう。シュピーゲル誌に投稿した文章で、ビルト紙の態度を「剥き出しのファシズム」(55)と呼んだ彼であれば、それも有り得ることだろう。

¹⁰ 作者は前景には登場しない多くの闇の事実があると指摘した上で、一例として警察の盗聴問題にふれ、これによって少なからぬ公務員の精神が蝕まれており、これこそ「教会と労働組合が協力して働ける領域」であると述べている。

11 カタリーナは教養人めいた趣味から、言葉にこだわるのではない。それは拘引される彼女が恋愛小説や探偵小説を持参したり(20)、押収品の中から諺付きのカレンダーが発見されること(51)からも明らかだ。テキストの他の場面でも、彼女の話し方は通俗的である。少なくとも、彼女の言動から世俗の言語に対する文学の逆襲を読み取ろうとした、今なお影響力ある Sölle の主張は不十分である。むしろ彼女の関心は、人間関係をめぐる言語に限定されている。この彼女の関心の意味を探るのが、本論の目的である。Sölle, Dorothee: *Heinrich Böll und die Eskalation der Gewalt*. In: *Merkur*. Heft 9(1974) S.885-887.

12 もちろん直接的な意味で、教会の商行為が云々されるわけではない。ただ例えば、カタリーナの父について調査する弁護士ブロンナに対して、カトリック教徒なら「服従の義務」(120)に従えと言ひ、協力を拒否する聖職者の姿が描かれている。これは商業的発想（一方性の原理）で貫徹される社会において位置を占め、非積極的な態度で、その他の機関と連動する教会のあり方を批判するものと言えるだろう。

13 これと同様の事態を今村仁司は、「貨幣形式は社会存在の根源にあり、それが人間の歴史性を構成する」(199)と述べている。また「貨幣と文字は墓の比喩を介してつながる」(170)という今村の命題は、一方性の原理は死の原理であり、社会制度において実現しているという、本論の主張とも共鳴するだろう。ただし人間の基本的形式を貨幣形式に見る彼の視点は、思考さえも商品の言葉で満たされた現在の状況において初めて可能である。その意味で商品的発想を自覚的に確認していくことは、現在における思想の課題である。だがそのとき思想は、実体的な言葉よりも、むしろ詩や希望や実践として現れるだろう。本論で考えるカタリーナの言動は、このような問題への応答であるように思われる。今村仁司：貨幣とは何だろうか（ちくま新書）1994。

14 「人間」が関係概念であることは、環境から孤立した主体概念を批判する構造主義や一切は因縁和合によって生滅すると説く仏法が共通して示した知見である。

15 このフランス語の原義には、作者も注意を促している。テキストには「このインタビューは本当に〈瞥見〉(Interview)であることが明らかとなった」(111)という記述がある。

16 あるとき作者は、ハンブルクの小学生から面白い質問を受けたという(N144f.)。それは二人は出獄したら、何をやるのだろうかという質問だった。まず彼は、自分はそこまで考えていなかったと正直に告白している。それから彼は、二人は小さなホテルを経営するだろうという答を与えている。この安易な返事は、もちろん私たちの考察には値しない。現代のメディア社会を否定したカタリーナがメディア社会に復帰したとき、どう生きるのかという問題は、テキストの根幹に関わる大切なテーマである。その意味で、この逸話は、作者の限界を示しているだろう。

17 愛が言葉で語られてよい唯一の場合は、愛が詩になるときである。「ああ、あの人こそ来るべき人だったのよ。私はあの人となら結婚し、子供を産んだでしょう」(59)というカタリーナの言葉は、もはや歌い出しているとさえ言えるだろう。

18 最後に、次のアドルノの言葉を掲げておきたい。市民生活を貫徹する「冷酷さ」と同一のもの

がアウシュビッツを生んだと考えるアドルノは、ビルト紙にナチスの政治的宣伝を透視するベルと問題意識を共有していた。そして希望を求める彼らの視線も、同じく、「冷酷さ」の余白を見つめていたようだ。「人間と事物に注いでいる光のうちで、超越の反照を光らせていないものはひとつとしてない。代替のきく交換の世界に対する対抗にあっては、世界の色彩が無と化すことを欲しない瞳の抵抗こそ抹消不可能なものである。仮象のうちには仮象なきものが約束されているのである。」アドルノ（木田元他訳）： 否定弁証法（作品社）1996、499頁。

Über Heinrich Bölls “Die verlorene Ehre der Katharina Blum”
die Gesellschaftskritik mit Relationsbegriffen “Zärtlichkeit” und “Zudringlichkeit”

Shin KIMOTO

Katharina Blum hat sich so viel verkaufen lassen, wie man fast kein Beispiel in der deutschen Literatur weiß. Dazu beigetragen hatte wesentlich die heftige Diskussion Bölls mit Bild-Zeitung um die Baader-Meinhof-Gruppe seit zwei Jahren. Der Autor wurde seither bei Pressen von Springer-Konzern denunziert, so daß man gern Bölls neues Buch als einen “Racheakt” des Autors verstanden hat. Der Text löst sich aber nicht leicht nur in der Entstehungsgeschichte auf. Das zeigt das Motto der Erzählung: Daß Ähnlichkeiten mit Bild-Zeitung bei der Schilderung gewisser journalistischer Praktiken “weder beabsichtigt noch zufällig, sondern unvermeidlich” sind. D.h., die Erzählung stellt keine Wiedergabe der Erfahrung Bölls dar, sondern sie wurde nach gewissen Grundsätzen der modernen Gesellschaft aufgebaut, die er im Kampf mit Pressen studiert hatte. Die Geschichte von Katharina Blum gewinnt insofern immer noch an Bedeutung, als der Autor mit diesen Grundsätzen recht haben kann.

Im Vordergrund geht es darum, wie skandalös die groß geschriebene ZEITUNG die unschuldige Katharina Blum zum Opfer bringt. Grund genommen ist hier gefragt: wie sich das Medium, das zum menschlichen Wesen gehört, verhalten sollte. In dieser Hinsicht ist der Sprachgebrauch von Katharina sehr auffallend. Ihre Sprachsensibilität beschränkt sich doch nur auf Ausdrücke von Verhalten der Männer ihr gegenüber. Ihr zufolge bedeutet “Zärtlichkeit” eine beiderseitige Handlung, während “Zudringlichkeit” eine einseitige Handlung darlegt; Sie hat sich von ihrem “zudringlich” gewordenen Mann scheiden lassen, und mit ihrem Geliebten Götten “große Zärtlichkeit” empfunden. Die beiden Relationsbegriffe lassen sich aber auch bei der

Analyse des Mediums, und darüber hinaus bei der Gesellschaftskritik, anwenden. Die Polizei und ZEITUNG, die im geheimen Informationen austauschen, bringen schließlich mit ihrer Zudringlichkeit die lebensfreudige Katharina fast zu einer Apathie. Diese Zudringlichkeit macht grundlegend die der Moderne eigene Perspektive aus, mit der etwas zu Tode seziert wird. Die Zärtlichkeit stellt hingegen eine lebenserwackende Beziehung dar. Am Ende der Erzählung erschießt Katharina Journalist Tötges, der zudringlich mit ihr "bumben" wollte. Damit sollte der Autor darauf hoffen, die herrschende Relationsweise umwendet zu werden.